

生徒の自己指導能力の育成を図る特別活動の実践研究

— 自己決定を促す学校行事活動シートの活用 —

総合支援部 高等学校支援課 長期研修員 松本 剛

1 主題設定の理由

これからの時代に求められる教育の実現に向け、2018年に学習指導要領が、2022年に生徒指導提要がそれぞれ改訂された。今回の改訂は、将来の変化を予測することが困難な未来社会を担うこどもたちが、社会の変化に受け身でばかりいるのではなく、その可能性を見出し、よりよい社会と豊かな人生を自ら創り出すために必要な資質・能力を育成することを目指して行われたものである。

生徒指導提要（2022）によれば、生徒指導は、「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えること」を目的としている。そして、生徒指導の目的を達成するためには、生徒自身が自己指導能力を身に付けることが重要である。この目的達成のためには、(1)自己存在感の感受、(2)共感的な人間関係の育成、(3)自己決定の場の提供の3つの実践上の視点が必要となってくる。一方で、高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説特別活動編によれば、特別活動の目的は、「「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを通して、資質・能力を育むことを目指す」と示され、これを達成するための3つの指導上の視点は(1)人間関係形成、(2)社会参画、(3)自己実現となっている。それぞれの3つの視点には共通点が多く、生徒指導と特別活動には、密接な関係があると言える。生徒指導提要（2022）にも「特別活動の指導は、生徒一人一人の生活や集団での協働的に活動する場面において、児童生徒の自主性や自発性を尊重しながら展開されるものである。生徒が主体となり積極的な学習活動が展開されるには、教員の深い生徒理解を基にした生徒指導の充実が不可欠である」と示されている。また、国立教育政策研究所が発行する生徒指導リーフの中でも、「特別活動の主たる目標は、望ましい集団活動を通して、自主的、実践的な態度を育成することや、自己の生き方についての考えや自覚を深め、自己を生かす能力を養うことであり、こうした目標を持つ特別活動の取組は、児童生徒の健全育成を目指す生徒指導の実践そのものである」としており、特別活動は、生徒指導の機能を教育活動の中で実践する重要な領域である。

研究協力校は、「幅広い人間性を育む教育活動を通して、社会に貢献しようとする志を持ち、最善を尽くして21世紀に自らの人生を切り拓き生き抜く人材の育成」を目指している。「社会に貢献しようとする志を持ち」、「自らの人生を切り拓き生き抜く人材」になるためには、生徒が自己指導能力を身に付ける必要があると考える。今回の実践を通して、生徒の自己指導能力の育成を図る教育活動の推進は、研究協力校の学校教育目標の実現にもつながると考えた。

2 研究の目的

本研究では、研究協力校において、生徒指導の機能を活かした特別活動での研究実践を行い、生徒の自己指導能力の変容について検証する。

3 研究の方法

研究協力校において特定のクラスを対象に次の方法で研究を行う。

- (1) 自己指導能力に関する事前調査を全ての生徒に実施し、現在の状況を把握する。
- (2) 生徒指導を活かした特別活動（学校行事・生徒会活動）についての提案を研究協力校の教員に対して行う。
- (3) 研究協力校の教員が(2)の提案を踏まえた特別活動の実践を行う。
- (4) 事後調査を実施し、研究実践の効果について検証する。

4 研究の内容

(1) 研究協力校の実態と分析

ア 研究協力校の概要

研究協力校は各学年が普通科8クラス、理数科1クラスで構成されている。第2学年普通科8クラスの内訳としては、文系5クラス、理系3クラスとなっている。

研究対象は、第1・2学年とし、各学年2クラスで実践を行った。

イ 事前調査の実施（5月下旬）

現状における生徒の実態を把握するため、生徒指導の実践上の3つの視点（「自己存在感」、「共感的な人間関係」、「自己決定」）をもとに質問を作成し、Google フォームにて調査を行った。質問は6件法で実施し、「6：よくあてはまる」、「5：あてはまる」、「4：どちらかというにあてはまる」、「3：どちらかというにあてはまらない」、「2：あてはまらない」、「1：全くあてはまらない」から最適なものを選択する形式とした。以下の分析では、「6：よくあてはまる」～「4：どちらかというにあてはまる」を「肯定群」、「3：どちらかというにあてはまらない」～「1：全くあてはまらない」を「否定群」とした。

(2) 研究の提案

ア 目標設定理論に基づいた、学校行事における取組の提案

研究協力校の学校行事では、生徒が行事に取り組む際、目標を持たないまま行われることが多く、「何を目的としているのか」や、「どういった力を身に付けさせたいのか」が不透明となっている。振り返りは行っているが、目標を設定していないため、成果の測定が困難であり、正しい振り返りができていないといえない。また、行事に対しての振り返りをするだけでは、行事同士のつながりが感じられない。自己指導能力の育成につなげるためには、前の行事で得た知識や経験を、今後の学校生活や次の行事でどう活かすのかを考察し、行動に移すが必要になる。

図1は今回の研究で取り組む学校行事のイメージである。E・A・ロックらの目標設定理論によれば、「具体的な目標」、「難易度の適切さを意識した目標設定」と「振り返りとフィードバック」を正しく行うことが、個人のパフォーマンスや達成感を向上さ

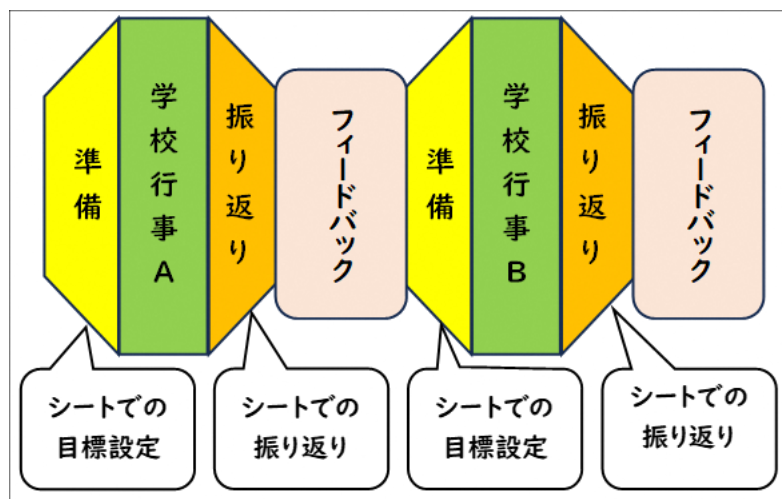


図1 本研究の学校行事のイメージ

せる効果があるとされている。そのため、本研究では学校行事目標シートを用いて、行事前に「目標設定」、行事後に「振り返り」を行っていく。そして、学校行事目標シートの記述をもとに教員が生徒に「フィードバック」を行うことで、次の行事に対しても、高い意識で行事に取り組むことが期待できると考えた。そのために、生徒が自ら目標作成や振り返りができ、教員が適切なフィードバックが行えるシートの内容を検討した。

イ 自己決定理論に基づいた、学校行事目標シートの内容についての提案

図2は自己決定理論に基づく、自己決定の6段階を表にしたものである。自己決定理論とは、E・L・デシらによって構築された動機づけの理論である。人が意欲的に行動するためには、「自分自身の選択で行動してい

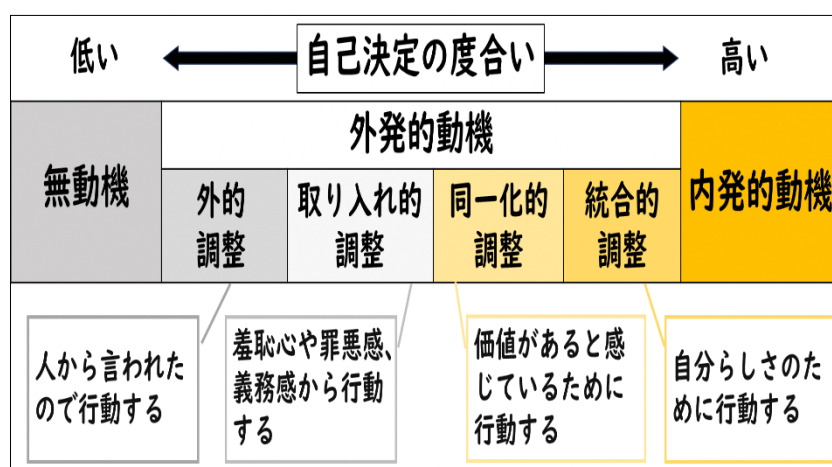


図2 自己決定の6段階（櫻井 2009）を元に作成

る」と感じられるかどうか重要であると言われている。自己の選択・決定が前提とされる目標作成を行い、自身の行動を動機づけることで、学校行事の意欲を高めることができる考えた。

外発的動機づけとは、人為的な刺激による動機づけのことである。その中でも、自己決定の程度が最も低い「外的調整」は、「叱られたくないから行動する」など報酬や罰などの外発的圧力によって行動が調整されている状態を表す。「取り入れ的調整」は、「恥をかきたくない」など、他人からどう見られるかという自尊心を維持するために行動が調整されている状態を表す。この2つの状態では、自己決定の度合いは低く、

モチベーションや成果に悪影響を与えてしまう。

一方、「同一化的調整」は、「自分にとって必要だから」など自分にとって価値があるかどうかが行動の理由となり、この段階から行動の理由が内在化されていく。外発的動機づけの段階の中で最も自己決定性が高い状態である「統合的調整」は、「自分らしさのため」など行動の理由が自分の価値観と一致しており、行動に対し違和感なく取り組める状態をいう。内発的動機づけの段階は、行動の内容自体に対する純粋な興味・関心・楽しさから行動する場合を指す。「楽しいから」、「好きだから」という理由で行動を起こすという状態である。自己決定理論では、外発的動機づけと内発的動機づけが一直線上にあるものとして捉えており、外発的動機づけと内発的動機づけは対立するものではなく、自己決定性を高めていくことで、その段階の移行が可能になると考えられている。本研究では、生徒が「同一化的調整」、「統合的調整」の段階まで目標作成ができるような学校行事目標シートの作成を目指した。

(3) 学校行事目標シート（以下、「行事シート」という）を活用した実践

ア 行事シート Ver. 1 の作成

学校行事目標シート		流達祭編	HRNO() 氏名()	
自分の目標	自分の役割を確実に果たすことにより、団体の目標や目的の達成に貢献する。	仲間と活動を一線に集しの中で、その後のHf等の活性化(良い雰囲気作り・活躍や思い出作)に貢献する。	一般の来賓者や地元の方々の振舞も意識し、高校生らしい実やかな挨拶を心掛け、マナーに注意する。	自己存在感
	指図や演習・展示ルールなどを厳守し、他の生徒の気分を害するような行動はしない。	事業段階から、友人やクラスメイトと普段以上に多く語り合う中で、共に楽しみ、友好を深める。	実行委員や生徒会役員の部活や貢献度についても理解し、互いを尊重し合って目標や目的を達成していく。	共感的な人間関係
	周囲からの指示を待つだけでなく、「やろうよ」と自ら周囲に声を掛け、目標や目的の達成のために取り組む。	自身のアイデアや発言・行動・作業などの貢献によって、Hf振や部活振を成功に導く。	自らの貢献によるHf振示等での成功・発表により、周囲の多くが充実した表情振を過ごせる振を創りだす。	自己決定
	【目標達成のためにこれに挑戦！】	【目標達成のためにこれに挑戦！】	【目標達成のためにこれに挑戦！】	
個人	クラス	学校		
【上手くいった事・上手くいかなかった事、その理由】		【上手くいった事・上手くいかなかった事、その理由】		
【今日の流達祭を通しての自分の新しい発見と友達の新しい発見を書いてみよう】				
【次の学校行事は7月の運動大会！意欲的な行事にするために、クラスでできることは何だろうか？】				

図3 行事シート Ver. 1

図3は目標設定理論と自己決定理論を基に作成した行事シート Ver. 1である。(2)で述べたように、目標が明確になることで、行事に対して主体的に行動できる生徒が増加すると考え、生徒が目標作成をしやすい行事シートとなっている。

あらかじめ9つの目標を設けており、上の行から順に、「自己存在感」、「共感的な人間関係」、「自己決定」に関する内容であり、左の列から順に、「自分」、「仲間」、「学校」単位で目指してもらいたい内容となっている。例えば、右上の目標であれば、行動の対象を学校とした目標であり、達成することで自己存在感の感受が見込まれるものである。それぞれの目標に対して、【A：目標は取り組みつつ、加えて自分の考えを行動に実行する】、【B：目標を意識して取り組む（取り組む内容を具体的に考え、行動に

移す)】、【C：目標に取り組んでみよう意識する】として行事を行う前に目標を立てる。AとBに関しては下の欄に具体例や考えを記入する。

目標をこちらで定めた理由としては3点ある。1点目は、特別活動を通して学校としてのねらいや生徒が身に付けて欲しい資質や能力を明確にするためである。2点目は、「自分で挑戦できそうな目標を選択する」ことで意思決定を迅速に行うことができるだけでなく、目標に具体性をもたせることができるからである。行事に対しての目標を生徒自身が一から考えると、漠然とした目標になりがちである。ある程度取り組むべき内容や事柄がある方が、生徒もどのように行動していけば良いのかイメージがしやすくなると考えた。3点目は、(2)でも述べた、目標設定理論と自己決定理論で重要な「難易度の適切さ」と「自己決定性」が調整しやすい点である。教員が生徒の実情に合わせた目標を立てることで、生徒が行動しやすく最適な難易度での目標作成が可能となると考えた。

行事終了後、2点に対して振り返りを行っていく。1点目は、行事前に作成した目標に対しての振り返りである。最初に、【A：目標に加えて、自分の考えを行動に移すことができた】、【B：目標通り頑張ることができた】、【C：取り組むことができなかった】としてA～Cの記号で結果を書いていく。自分が作成した目標を、行事を通してどの程度達成できたのかを考えることで、自分の行動を振り返りやすくなる。また、クラスや学校のためにどのように貢献できたのかを見つめ直す手助けになると考えた。2点目は、行事を通しての、自分と友人の新しい発見に対する振り返りである。これらは、自ら作成した目標に向けて全力で取り組んだからこそ見つけられるものである。行事の中で主体的に自分が行動することで得られる「自己存在感」と、仲間と積極的に関わることで見つけることができる「共感的な人間関係」を育むことができると考えた。

最後に、今回の行事で得た経験を活かして、次の行事までの期間にできる自分の計画とクラスでの目標を考えていく。行事と行事の間の期間も、自分自身・クラスでの行動や活動に意味を持たせること、次の行事前に行う目標設定が円滑に進むことをねらいとしている。また、クラスという集団で次の行事までにできる取組を考え、共有することで「自己決定」と「共感的な人間関係」の育成につながると考えた。

イ 行事シート Ver.1 での実践（文化祭・運動大会・体育大会）

(7) 目標作成と振り返りの記述

【目標達成の為にこれに挑戦！】 運営側からの指示が出るときは、 静かに聞き、必要に応じてメモを取る。	➡	【上手くいった事・上手くいかなかった事、その理由】 2日目の開会式の際、司会の人々が 話し始めていたのに気づき、周りを 見ながら話を聞いておくことができた。
【目標達成の為にこれに挑戦！】 コミュニケーションをとることを意識し、助け合い ながら競技に参加する。	➡	【上手くいった事・上手くいかなかった事、その理由】 次の試合の時間やメンバーについて先を読んで 話し合うことができた。また、チームメイトを しっかりと応援しながら楽しむことができた。

図4 行事シートの生徒記入一例（目標と振り返り）

図4は、実際に生徒が作成した目標と振り返りである。与えられた目標から生徒自身が具体的な行動を考えることで、意識して活動ができていることが読み取れる。また、行事を楽しむためには、自分だけでなく、クラスの仲間や運営する生徒の気持ちまで考えることの重要性が理解できている内容となっている。

振り返りでは、目標作成で考えた内容を行動に移すことができたことが伺える。自分に立てた目標も、他者にまで目を向け、仲間に対して声掛けするなどの実践することができた。具体的な行動目標を事前に考え、意識して行事に取り組んだことによるものだと考えられる。

(イ) 改良に向けて

行事シートを使つての実践を数回行う中で、Ver. 1の行事シートでは目標作成に時間がかかる点、与えられている目標が作為的に感じられる点、構成が複雑である点、友人の新しい発見が活用できていない点が課題に挙げられた。また、教員が作成する分量も多いことから、負担感の軽減が必要だと感じた。

そこで、生徒の作成時間の削減と簡素化を目的として、「対象」と「行動の価値付け」を選択形式にした。これにより、生徒の目標作成の時間短縮だけでなく、「誰のために」、「何のために」を考えて具体的な行動を考えているのかが一目見て分かるようになった。また、行動の価値付けを生徒自身が考えることで、自己決定理論における「同一化的調整」や「統合的調整」の段階での目標作成の手助けになる。さらに、教員側から誘導し過ぎないことで、目標をより自分らしいものとするができる。教員が考える部分としては、対象と行動の価値付けだけであり、最小限の負担で済ませることができると考えた。

ウ 行事シート Ver. 2の作成

図5は、(イ)改良に向けてを基に作成した行事シート Ver. 2である。目標提示を行わない代わりに、行事目的を入れた。学校として考える「行事を通して生徒に身に付けさせたい力」を表記することで、行事の目的を整理し目標作成のための指針になると考えたからである。

目標作成では、左側が「自己存在感」の感受を高める目標、右側が「共感的な人間関係」を育む目標となっている。「自己存在感」を強調するために「～の一員として」、「共感的な人間関係」を強調するために「～の気持ちを考えて」という語句を入れている。Ver. 1とは違い、Ver. 2では「自己決定」の目標に関しては作成しない。自分自身で目標を定め、具体的にどのようなことを行えば良いのかを考え、行動すること自体が「自己決定」につながると考えたからである。

振り返りでは、目標に対する達成度を100点満点で数値化した。A～Cでは抽象的で、正確な達成度を明記することができないと考えたからである。また、達成度を正しく付けることで3点の効果を期待した。1点目は自己改善の意識が高まる点である。自分で点数をつけることにより、評価基準が自分の中で明確になり、今後の改善点を具体的に意識することができる。点数が低い場合でも、次の行事に向けてどう改善す

るかを考える姿勢が身に付くと考えた。2点目は、振り返りの深さが増す点である。なぜその点数をつけたのかを下の欄に具体的に記述することで自分自身の努力や疎かにしてしまった部分を客観的に見直すきっかけになると考えた。3点目は、生徒自身がフィードバックを受け入れやすくなる点である。自分がつけた点数について、教師やクラスメイトからの評価や意見を照らし合わせることで、新たな気付きを得ることができると考えた。

Ver. 1でも行っていた、自分と他者の新しい気付きを書く欄は継続したが、Ver. 2では友人の名前を書く欄を設けた。記名式にすることで、行事後に行うフィードバックで名前を書かれた生徒に声掛けするなど活用しやすくなっている。

研修旅行と保育体験実習が実践研究での最後の学校行事になったため、次の行事に向けての記述欄は省略されている。次の学校行事があれば、Ver. 1同様に個人やクラスでの目標を考える欄は作成する。

研修旅行と保育体験実習が実践研究での最後の学校行事になったため、次の行事に向けての記述欄は省略されている。次の学校行事があれば、Ver. 1同様に個人やクラスでの目標を考える欄は作成する。

エ 行事シート Ver. 2 での実践（修学旅行・保育体験実習）

(7) 目標作成の記述

図6は、実際に生徒が考えた保育体験実習と研修旅行での目標作成の一例である。漠然とした「頑張る」や「行動する」ではなく、具体的な内容まで記入していることが見て取れる。目標作成の所要時間も数分程度で行うことができ、生徒の負担感の軽減を図った。

記述の中には行動の価値付けを2つ行った生徒や、第三者（一

学校行事目標シート 研修旅行編 HRNO() 氏名()

【行事目的】

①団体行動をとおして、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、責任感・協調性・自主的な生活態度を養う。
②研修地の歴史・自然・文化に触れ、見聞を広め、自然や文化財を保護・尊重する態度を養う。
③班別研修をとおして、自主的・自律的行動を養う。

私の研修旅行宣言！！

□班 □クラス □学年 □学校の一人として

□貢献する □牽引する
□連携を深める □約束を守る
□責任感をもつ □他者を尊重する
□協調する □

気持ちは考え、

研修旅行にする為に

をします！

研修旅行宣言について振り返ってみよう！

目標に対する達成度 0 20 40 60 80 100

振り返り

今回の研修旅行を通しての自分の新しい発見と友達との新しい発見+良い所を書いてみよう

【自分】

【友人】

さん →
さん →
さん →

図5 行事シート Ver. 2

□担当する班 □クラス □学校の一人として

□園児 □園の先生 □クラスメイトの

□貢献する □牽引する
□連携を深める □約束を守る
□責任感をもつ □他者を尊重する
□協調する □

気持ちは考え、

保育体験実習にする為に

をします！

研修旅行宣言について振り返ってみよう！

目標に対する達成度 0 20 40 60 80 100

振り返り

今回の保育体験実習を通しての自分の新しい発見と友達との新しい発見+良い所を書いてみよう

【自分】

【友人】

さん →
さん →
さん →

図6 生徒記入一例（目標）

般のお客様）に対しての目標を考えることができた生徒、赤と青の2種類のペンを使うことでそれぞれの対象に対して違った目標を考えた生徒もいた。集団の中での自分の存在意義や様々な人の立場になって考えることで、具体的な目標を想像しながら記述することができた。対象や価値付けの部分を、学校目標に合わせてこちらで用意するだけで、教員の準備も最小限に済ませることができた。

(イ) 振り返りの記述

図7は、保育体験実習と研修旅行における生徒が記入した振り返りになる。目標に対して具体的な振り返りができていることが見て取れる。中には、目標に対する達成度が高得点であるが、自分に足りなかった部分やもう少し改善できた点まで記入し、次につなげようとするものもあった。

図8は、保育体験実習と研修旅行における生徒が記入した自分の新しい発見である。目標を立て、行事に真剣に向き合うことで得られる自分の気付きは、今後の学校生活でも必要になってくる。これが生徒の自信につながり、次の挑戦への手助けになると考えられる。

オ 行事間でのフィードバック

図9は、行事シートに記載されている内容を全体で共有を図るクラス掲示である。仲間の「行事に対する取組」や「行事を通しての発見」等をまとめたものとなっている。行事に対する考え方の共有や、行事を通しての頑張りを評価することで、自身の行動に自信がつくだけでなく、協調性を養うことが期待できる。行事シートを電子化しなかったのは、生徒自身が書いた文字を大切にしたいからである。自分が書いた文章や文字が載ることで生徒は喜びや達成感を感じると考えた。この経験が次の行事に向けての意欲につながり、さらなる挑戦につ

Figure 7 shows four examples of student reflections. Each example includes a progress bar labeled '目標に対する達成度' (Degree of achievement towards the goal) with a scale from 0 to 100. The handwritten text in each box describes the student's experience and reflection on their goal.

図7 生徒記入一例（振り返り）

Figure 8 shows four examples of student reflections. Each example is a box with the title '【自分】' (Myself) and handwritten text in Japanese describing the student's new discovery or realization.

図8 生徒記入一例（自分の新しい発見）

Figure 9 shows a class display of the reflection sheet. The sheet is titled '12月 保育体験実習の振り返り' (December Reflection on the Child Care Experience) and 'みんなの【保育体験実習宣言】と【振り返り】' (Everyone's [Child Care Experience Declaration] and [Reflection]). It contains multiple columns of student reflections, organized into sections like 'みんなの新しい発見' (Everyone's New Discovery) and '友達の良いところ' (Friends' Good Points).

図9 振り返りシートの共有を図る
クラス掲示

なっていく。

行事シートは面談等でも活用することができ、生徒の頑張りや努力に対するフィードバックを適切に行うことができる。作成した行事シートでは、目標作成の目的、具体的な目標、それに対する振り返り、自分と友人の良かった点等、生徒に還元できる内容が多く含まれている。行事シートに書かれている記述を通して生徒の成長を認め、教員が最適な声掛けをすることで、生徒の自己指導能力が育成されていくと考える。

(4) 事後アンケートの実施（11月下旬）

全4回の学校行事を通して、生徒の意識に変化があったかを見取るため、事後調査を事前調査と同じ内容で11月下旬に実施した。結果の分析は、事前・事後とも調査を回収した生徒を対象とし、事前・事後調査での変化を見た。シートを使用した群を、「実践あり」（148名）とし、シートを使用していない群を「実践なし」（485名）とする。

ア 生徒の変容

(7) 自己決定に関する変容

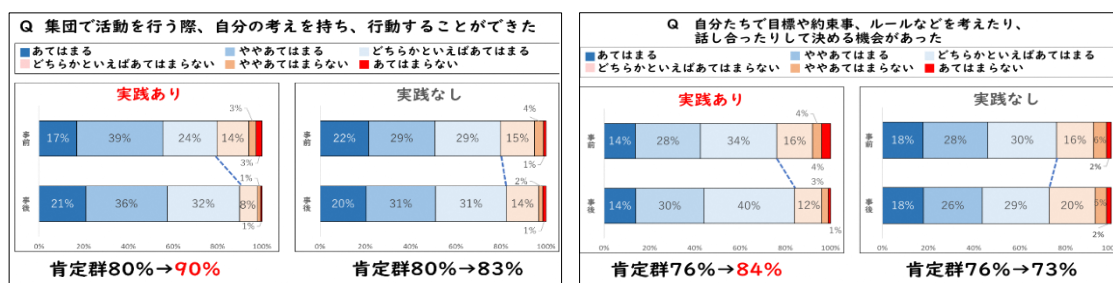


図 10 自己決定に関する調査結果(%)

図 10 のとおり「集団で活動を行う際、自分の考えを持ち、行動することができた」、「自分たちで目標や約束事、ルールなどを考えたり、話し合ったりして決める機会があった」という「自己決定」に関する質問において、「実践あり」の肯定群は事前調査と比較し事後調査が有意に高かった（ウィルコクソンの符号付順位検定、 $p < .05$ ）。一方、「実践なし」の肯定群は有意に高いとは言えなかった（ウィルコクソンの符号付順位検定、 $p > .05$ ）。行事シートを使用したことで生徒が自己決定する機会が増加しただけでなく、その考えをもとに行動に移しやすくなったと推察される。また、自己決定を通して自分の意見や考えを持つことで、積極的に他者に伝える機会が増加したと考えられる。

(4) 自己存在感に関する変容

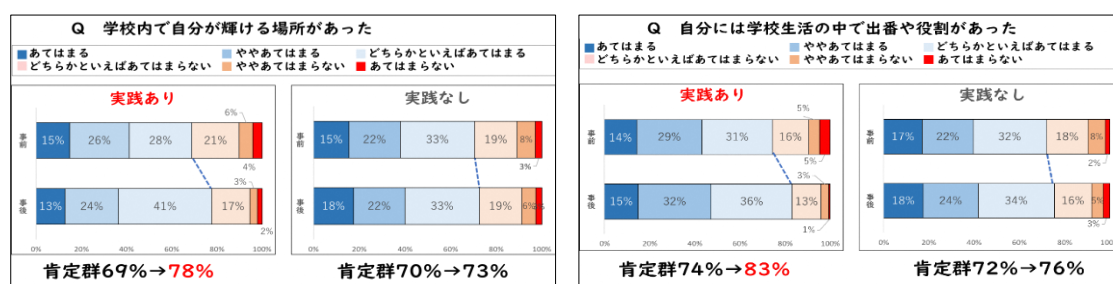


図 11 自己存在感に関する調査

図 11 のとおり「学校内で自分が輝ける場所があった」、「自分には学校生活の中で

出番や役割があった」という「自己存在感」に関する質問において、「実践あり」は事前調査と比較し事後調査が有意に高かった（ウィルコクソンの符号付順位検定、 $p < .05$ ）。一方、「実践なし」は有意に高いとは言えなかった（ウィルコクソンの符号付順位検定、 $p > .05$ ）。行事シートを使用したことで、集団の中で自分の出番や役割を見出すことができた と推察される。

(ウ) 共感的な人間関係に関する変容

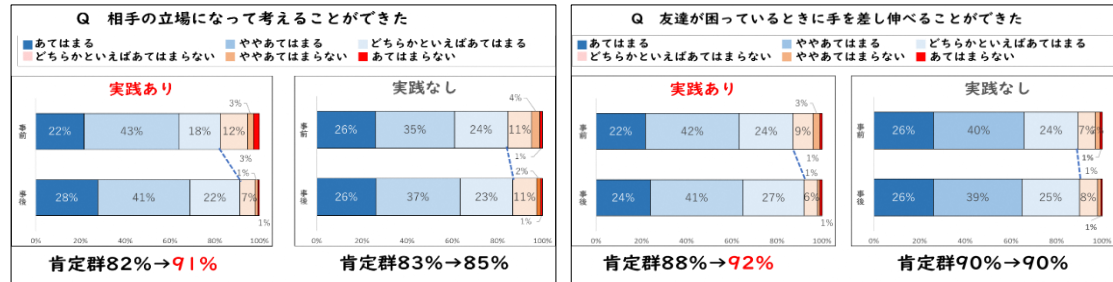


図 12 共感的な人間関係に関する調査結果 (%)

図 12 のとおり「相手の立場になって考えることができる」という「共感的な人間関係」に関する質問において、「実践あり」は、事前調査と比較し事後調査が有意に高かった（ウィルコクソンの符号付順位検定、 $p < .05$ ）。一方、「実践なし」は有意に高いとは言えなかった（ウィルコクソンの符号付順位検定、 $p > .05$ ）。同様に、「友達が困っているときに手を差し伸べることができた」という質問では、有意な差とまではいえないものの、「実践あり」は肯定群の割合が 4 ポイント増加した（ウィルコクソンの符号付順位検定、 $p > .05$ ）。一方、「実践なし」は肯定群の割合に変化はみられなかった。行事シートを使用したことで、相手の考えを理解して思いやりをもって行動することができた と推察される。

イ 行事シート使用後の感想

図 13 及び 14 は、行事シートを使用した 148 名に、行事シートの使用に関する調査結果である。目標作成のしやすさ、目標を考えることでの行事に取り組む意欲の向上、振り返りのしやすさ等の質問に対して肯定的な意見が 90% 近くあることが見て取れる。

表 1 は、行事シートの活用で、行事に対する取組に変化したことがあるかについての質問に対する自由記述の一部である。行事シートを使用するこ

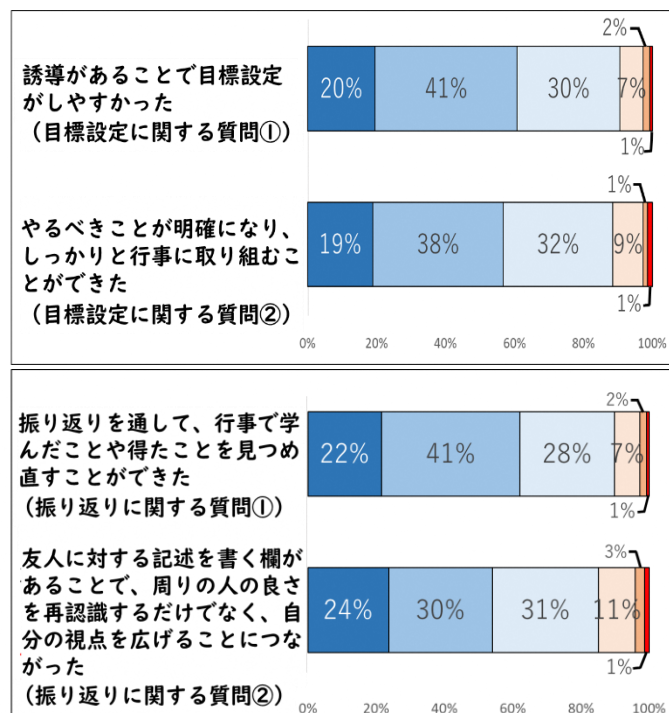


図 13 行事シートの使用に関する調査結果 (%)

とで、行事に対して積極的に取り組むことができるようになったという記述や充実感や真剣さが増したという記述もあった。目標作成を経て、行事を自分事として捉えることができるようになり、行事に取り組む姿勢に変化をもたらしたものと推察できる。

表 1 事後調査での自由記述

行事シートの活用で、行事に対する取組に変化したことに関する自由記述（一部抜粋）
・ 昨年よりも積極的に行事に取り組めるようになった ・ 自分の目標がより具体的になり、行事に積極的に参加することができた ・ 目標を意識して行事に取り組むことによって充実感がうまれた ・ 自分の中で個人的な目標が作れたのでより行事に対する真剣さが増した ・ 今までよりも周囲を見て行動することができた ・ 意識することが自分だけでなく周りや学校全体になった ・ 行事により楽しむにあたって頭の中が整理できた ・ 明確な目標を立てることで自分がどんなことを頑張ればいいのか考えやすかった ・ クラスに対して想像しなかった方向からの貢献の仕方を見つけられた

表 2 は、行事シートを活用したクラスの教員 4 名へのアンケート結果の一部である。全ての教員が行事シートに対して肯定的に捉えていた。教員自身も生徒の行動や成果を記録として振り返ることができ、指導の改善点を見つけることができたという意見もあった。行事シートを活用することで、生徒と共に行事を振り返りながら、指導方法を柔軟に調整できるため、より効果的な指導が可能になる。生徒一人ひとりの成長に寄り添うことも、行事シートは教員にとっても非常に有用なツールとなるのではないかと考える。

表 2 行事シートを活用したクラスの教員の自由記述

行事シートについて自由記述（一部抜粋）
・ 行事の中で、自分が発見できなかった部分の生徒の頑張りをシートを通して知ることができた ・ 三者面談でシートを活用して学校での様子を保護者に伝えるときにも活用できた ・ 特に、Ver 2 は短時間で目標作成ができるのがよい。行事へのモチベーションの向上につながっていると感じる ・ 回数を重ねるにつれ、記述内容が深くなっており、それに比例して行事への取組も良くなった ・ 学級掲示を取り囲んで楽しそうに話し合う姿をみるのが嬉しい

ウ 各行事シートの使用感

図 15 及び表 3 は、行事シートを使用した 148 名に、Ver. 1 と Ver. 2 のどちらの方が使いやすいと感じたのかの調査結果と自由記述である。簡素化した Ver. 2の方が使いやすいという意見が多い一方で、Ver. 1 も一定数いた。「最初から設定されている目標をもとに自分の目標を考えられるので書きやすかった」という意見もあり、具体的な目標を提示する方が取り組みやすいと考える生徒もいることが伺える。しかし、Ver. 1の方が Ver. 2 よりも 2 回多く実践を行ったため、

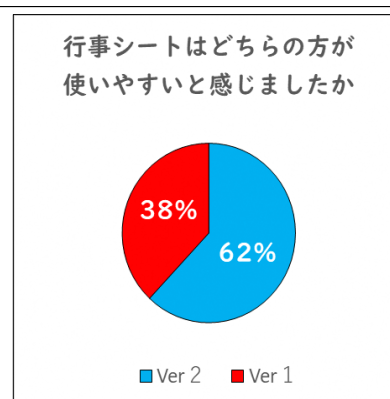


図 15 行事シートの使用しやすさに関する調査結果

Ver. 1 の記述の仕方に慣れた生徒もいるのではないかと推察される。

Ver. 2 では、目標設定の手軽さを挙げている生徒が多かった。その中でも、「発想の選択肢が既に配置されており自分に合ったものを正確に表しやすい」という意見もあり、行動の価値付けを与えることで「統合的調整」の段階の目標設定ができていることが伺える。また、振り返りに関しても肯定的な意見があった。「目標に対する達成度を具体的に数値化することで、その後の言葉で書く振り返りがしやすかった」という意見もあり、自己評価を正確につけることが生徒の振り返りの質を向上させる要因であると推察できる。

教員と生徒の感想や回答結果からみても、目標設定の手軽さや振り返りの質等の要素から Ver. 2 を推奨する。

表 3 どちらのシートの方が使いやすいと感じたのか生徒の自由記述（一部抜粋）

行事シートVer1の方が使いやすいと感じた生徒の自由記述（一部抜粋）
・ 最初から設定されている目標をもとにして自分の目標を考えられるので書きやすかった ・ 自分、仲間、学校という観点のなかでさらに3つに分けられていてやらなければいけないことや、気をつけるポイントが分かり、色々なことに気をつけて動けた ・ 各分野に関する大まかな目標(A、B、C)があったことで細かな目標作成がしやすかった ・ 設定したことに対して結果や反省が書きやすい ・ 自分が目標を達成したかどうかアルファベットで一目でわかる ・ 評価をつけやすい
行事シートVer2の方が使いやすいと感じた生徒の自由記述（一部抜粋）
・ 書くときの誘導がわかりやすかった ・ 内容がわかりやすく、目標設定がしやすかった ・ 発想の選択肢が既に配置されており自分にあったモノを正確に表しやすい ・ 立場を自分で選んでかけるところが良かった ・ 自分の行動を客観的に評価でき、具体的な数値で自己反省する事ができる ・ 自分で目標を設定して課題に取り組める ・ 目標に対する達成度を具体的に数値化することでその後の言葉で書く振り返りがしやすかった

5 研究のまとめ

(1) 成果

行事シートを活用することで、生徒の自己決定を促し行事への主体的参加を通して、自己指導能力の向上が見込まれることが分かった。目標設定を通じて、生徒は自分の役割や達成すべきことを明確にすることで、目的意識を持って行事に取り組むことができる。振り返りのプロセスを通じて、自分の行動や成果を客観的に評価し、改善点を見つける力を養うことができる。この自己評価は、次回の学校行事や自身の行動に反映させるための重要なステップとなる。最後に、フィードバックを受けることで、他者からの意見を取り入れ、自分の視野を広げ、より良い自己改善につながる。これらの活動を繰り返すことで、生徒は自分自身を客観的に見つめ、自己指導能力を高めることができたと考えられる。

(2) 課題

行事シート Ver. 1 と Ver. 2 では、目標設定の仕方は共に誘導形式ではあるものの大きな違いがある。Ver. 1 は具体的な事例が示されているが、Ver. 2 では示されていない点である。事例を示された方が自分の行動をイメージしやすい生徒もおり、Ver. 2 の記

述に時間がかかってしまった生徒もいた。

ア 生徒自身に Ver. 1 と Ver. 2 を選ばせるということも、重要な「自己決定」になるのではないかと考えた。そのためには、教員の負担が大きい Ver. 1 の項目の選定や内容の見直しをする必要がある。

イ 今回の実践研究では Ver. 1 を 3 回、Ver. 2 を 1 回の実践になった。最初の学校行事から Ver. 2 を使用した場合、目標作成に苦勞するのではないかという意見もあった。Ver. 1 と Ver. 2 の状況によつての使用タイミングを考える必要がある。

ウ 今回の実践研究では、行事シートに取り組むタイミングを「目標作成」は行事の前、「振り返りとフィードバック」は行事の後のような大まかなタイミングは決めたが、詳細には指示していなかった。「目標作成」、「振り返りとフィードバック」の最適なタイミングやシートの内容の修正や確認をする時間を設けるべきなのかを検証する必要がある。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々に支えられました。特に、実践をしていただいた先生方におかれましては、事前事後調査、学校行事シートの活用、フィードバック、学級通信の作成等、時間を惜しまずご協力いただき、研究が順調に進むことができました。本研究が成り立ったのは、皆様の助けがあったからこそであり、心より感謝申し上げます。

【参考文献・資料】

- [1] 文部科学省(令和 4 年 12 月)生徒指導提要
- [2] 「特別活動と生徒指導」国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 生徒指導リーフ Leaf 6
- [3] 文部科学省(平成 30 年告示)高等学校学習指導要領
- [4] 国立教育政策研究所【中学・高等学校編】学校文化を創る特別活動
- [5] 静岡県総合教育センター(平成 30 年 3 月)「主体的・対話的で深い学び」実現のためのサポートブック
- [6] 三浦麻子(1996)課題遂行におよぼす目標設定と自律性の効果
- [7] E・A・ロック、G・P・ラザム(著) 松井賚夫・角山剛(訳)(1984)目標が人を動かす:効果的な意欲づけの技法
- [8] E・L・デシ、リチャード・フラスト(1999)人を伸ばすカー内発と自律のすすめ
- [9] 櫻井茂男(2009)自ら学ぶ意欲の心理学ーキャリア発達の視点を加えて
- [10] 静岡県立浜松南高等学校(2024)「学校経営目標」